

家形埴輪 1（入母屋造平地式建物）

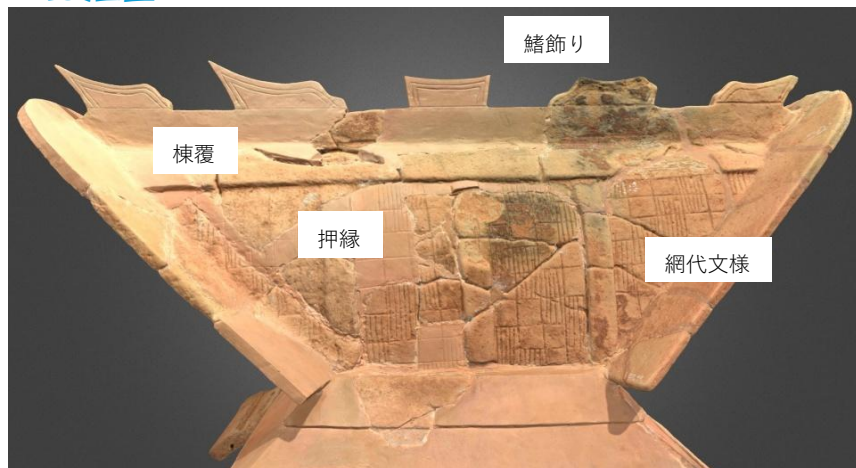


①概要

公開している画像の中に、「家形埴輪 1（入母屋造平地式建物）」という 2 点の遺物があります。この埴輪は、いずれも加古川市最大の前方後円墳である行者塚古墳から出土したものです。行者塚古墳には、古墳の墳丘から突出した「造り出し」と呼ばれる舞台のような施設が 4 つあり、左の埴輪は「西造り出し」、右の埴輪は「北東造り出し」から出土しています。発掘調査の結果、西造り出しは古墳の中心人物に対する「祭祀の場」、北東造り出しは中心人物の関係者の「埋葬の場」として利用されたことが分かっています。

古墳から出土する家形埴輪は、当時実際に存在した住居や倉庫などをモデルとして作られたと考えられています。屋根の形でいくつか分類ができ、本資料は下屋根が寄棟、上屋根が切妻となる「入母屋造（いりもやづくり）」という最も豪華なつくりをしています。床を支える支柱の表現がないので、両者とも地面を床とする「平地式」の建物になります。大きさは、右の埴輪が高さ 79.5cm、幅（平側） 53.0cm、奥行（妻側） 39.6cm、左の埴輪が高さ 60.8cm、幅（平側） 39.1cm、奥行（妻側） 30.6cm です。

②ここに注目！！



上屋根は大きく誇張されています。ここでは、残りの良い北東造り出しの資料を中心に注目ポイントを説明します。

最上部の棟の上には緒（ひれ）飾りが付き、棟は厚手に作られて建物の棟覆（むねおい）を表現しています。平側（横面）全体には網代（あじろ）文様が線刻で表現され、網代を押さえるための押縁（おしぶち）が 3 本垂直に表現されています。



妻側は、屋根の端となる破風板（はふいた）が大きく誇張されています。破風の下には棟木の先端が表現され、壁には棟木を支える棟持柱（むなもちばしら）が 2 本線で表現されています。下屋根と接する部分に横方向の梁が表現され、その上に棟持柱を据えているというイメージでしょう。



壁には、入口 1 か所と窓のような開口部が 7 か所あります。入口は縦長の開口部で、下がくぼんでいて、周りは線刻で強調されています。窓のような開口部との間は柱を表しており、平らな角柱です。地面に相当する部分には裾廻突帯（すそまわりとったい）と呼ばれる粘土板が貼付されています。

注目は、本来一周しているはずの裾廻突帯が剥がれている部分です。そこには一本線が引かれており、埴輪を作る人が粘土板を貼り付ける時のガイドラインとして線を引いていたことが分かります。完形品だったら見ることでできない部分に新たな発見が隠されていることがあります。



その他の注目点として、埴輪を作る際の調整痕があります。粘土を積み上げて形をつくり、表面はへらのような板で平らに仕上げます。表面には、板状工具の木目が残っています。仕上がったら、赤色の顔料で全体を塗って完成です。

★今回公開している 2 点の家形埴輪（入母屋造平地式建物）は、よく似ていますが違いもあります。網代の表現、入口の場所、壁の文様など、違いを探してみてください！